

18) 長期筋弛緩剤投与後に見られた遷延性運動麻痺の3例

丸山 正則・西村 喜宏 (新潟市民病院)
海老根美子・永田 幸路 (麻酔科)
広瀬 保夫 (同救命救急センター)

最近我々はステロイド大量療法が行われている喘息重積発作または間質性肺炎急性増悪患者に、鎮静薬、筋弛緩薬を用いて長期人工呼吸管理を行ったところ、これらの薬剤の離脱期になっても全身の筋力低下、運動麻痺が改善せず、数か月後肺炎その他により全身状態の悪化を来して死亡した3例を経験した。

同様の報告は国外においてはいくつか見られていたが、この問題に関する本邦での認識は遅く、未だ邦文の報告はない。その成因については多くの議論がなされているが、結論は得られていない。我々の症例で見るとステロイドとの関連が濃厚に示唆される。筋弛緩薬の長期使用にあたっては、このような病態の存在を頭に入れておくことが重要である。

19) パラコートに代わる新しい農薬、グルホシネート (バスタ[®]) による中毒の1例

広瀬 保夫 (新潟市民病院)
丸山 正則・西村 喜宏 (救命救急センター)
海老根美子・永田 幸路 (同 麻酔科)

症例は39歳、精神分裂病の女性。バスタ液剤[®]を自殺目的に約300ml飲用した。8時間後に近医を受診したが、無症状であったため無治療で入院中の某精神科に帰院した。飲用23時間後に意識障害、呼吸抑制、全身の痙攣が出現。当院に搬送され人工呼吸管理、強制利尿、血液吸着を施行した。第4病日に抜管し、特に後遺症を認めず某精神科に帰院した。

グルホシネートは1984年頃より使用され始めた、含リンアミノ酸系の除草剤である。人体には比較的低毒性とされている。本中毒の報告は少なく、臨床経過は明らかでなく、治療方針も確立していない。本中毒の診療では、遅発性の中樞神経症状を念頭においた慎重な経過観察が必要であると考えられた。

20) 呼吸不全患者に対する IRV (Inversed Ratio Ventilariion) の施行経験

鳥海 岳 (新潟大学麻酔科)
左利 厚生 (倉敷中央病院)
麻酔科

われわれは、呼吸不全患者に対し Inversed Ratio Ventilation (IRV) を行った。吸呼気比が2:1の IRV により、 PaO_2/FiO_2 、シャント率は改善した。 $PaCO_2$ は変化がなかった。最高気道内圧は低下し平均気道内圧は上昇した。血行動態には変化がなかったが、肺動脈楔入圧と右房圧は上昇した。Auto-PEEP および食道内圧は呼吸気圧が大きくなるにつれ上昇した。IRV が肺酸化能を改善させる機序は、呼吸時間の短縮のため呼吸の一部が Trap され、いわゆる Auto-PEEP が発生し、FRC が増加するためと考えられる。IRV は、最高気道内圧が高く CPPV により改善しない呼吸不全が適応となる。免疫不全、急性腎不全など重篤な基礎疾患に合併した呼吸不全では IRV により肺酸化能の改善が得られなかった。

21) Nitroglycerin の低酸素時冠血管拡張機構

佐久間一弘・福田 悟 (新潟大学麻酔科)

前回懇話会で我々は nitroglycerin の冠血管弛緩作用が低酸素時に増強することを報告した。今回この増強作用への cGMP の関与を検討したので報告する。

〈方法〉ブタの冠状動脈前下行枝より輪状標本を作製した。Krebs 液中で静止時張力を 2g に保った。endothelin 投与後 nitroglycerin を容量依存的に投与した。また cGMP・cAMP を radioimmunoassay 法、蛋白を Lawry 法により測定した。

〈結果と考察〉methylene blue により guanylate cyclase を抑制した場合、低酸素群では弛緩反応は抑制されなかった。nitroglycerin は対象群で cGMP を増加したが低酸素群では増加は無かった。以上より nitroglycerin の低酸素時冠血管弛緩増強作用には cGMP 以外の作用が考えられる。